CSRの取り組み

より良質な番組をめざして

番組づくりにメリットをもたらすファイル化への取り組み

テレビ東京では、取材・収録からOA、アーカイブなどの二次利用に至るワークフローのファイルベース化を進めています。テープベースからファイルベースへの移行によって、映像制作における作業効率や編集のクオリティーを向上。より良質な番組づくりをめざしていきます。

より安心・安全な映像を届ける体制

長年にわたり、国内の放送業界ではテープベースのワークフローが主流でした。ところが近年は国内外への番組販売やDVD販売、ネット配信といった番組の二次利用の需要が拡大。それに伴い、使いやすいデータが求められるようになりました。また、コンピューター技術の進化により誰もが容易にデータを扱えるようになり、現在は業界全体でファイルベースへの切り替えが進んでいます。

テレビ東京では報道局を皮切りに、2014年8月から本格的なファイル化がスタートしました。それにより、様々なメリットが生まれています。その一つが、映像伝送の簡易化。テープベースでは衛星回線を使い大容量の映像信号を送っていましたが、ファイル化することで世界中のどこからでもパソコンとインターネットで容易に映像信号を送信できるようになりました。また、送られてきた映像をサーバーに取り込む工程では、テープは実時間を要するのに対し、データは実時間の1/4〜1/5の時間で完了。一つのテープの編集は基本的に一人しか行えませんが、データであれば簡単に共有でき、複数人が同時に編集できるなど、あらゆる場面で作業効率が向上します。

さらに、高度な編集が速やかにできるようにもなりました。たとえばテープではモザイクなどの映像加工に時間がかかってしまうので、生放送直前に加工が必要な映像が届くと対応しきれないこともあります。一方、データであれば思い通りに加工しやすくなり、短時間で確実に加工を施すことが可能。フラッシュ映像の点滅を和らげる加工もすぐにできるなど、安心・安全な映像をお届けする体制がより強化されています。

ファイルベースでのニュース番組制作ワークフロー

取材・収録 → 編　集 → 取り込み

サイズが格段と小さくなり、使用回数はテープの10回程度から1,000回以上可能に。

ファイル共有で複数人による同時編集が可能に。テープのように早送りや巻き戻しの手間がなくなり、作業が効率化した。また、今までよりも高度な加工編集が手軽に行えるようになった。

編集済みデータが、OAサーバーに転送され、番組放送の準備完了。

テープには映像の注意点などを書いたメモを添え、担当者へ手渡ししていた。しかしファイル化すると映像の受け渡しはデータ送信で完結するため、担当者間の直接やり取りが発生しない。ミスがないよう、丁寧にコミュニケーションをとる意識が必要となる。

テープ1本で約2時間分の映像を収録。一方アーカイブ専用ディスクは、1カートリッジで約50時間分の収録が可能。ディスクの利用が省資源につながる。

テープ(右)に比べディスク(左)の方が大幅にコンパクトで、省スペース化を実現。

ファイル化が実現する省資源

環境面でのメリットも生まれました。テープの重ね撮りは10回程度が限界でしたが、ファイル化に伴って採用したディスクは1000回以上の書き換えができます。しかもテープは保管状況によって傷みやすく再生不能になることがありますが、ディスクは傷みにくく保管しやすくなっています。また、テープ1本で約2時間分の映像を収録できるのに対し、アーカイブ専用ディスクは1カートリッジで約50時間分の収録が可能な上、保存寿命が50年以上と耐久性が高いことも特長。つまり、ディスクを利用することで省資源を実現しているのです。

さらなる“良質”を求め続ける

テレビ東京でのファイル化はまだ始まったばかり。メリットがある一方で、いくつかの課題も見えてきています。たとえば映像のデータが集まるサーバーは24時間稼働しているので、より省電力な機械の導入を検討していかなければなりません。データ量が膨大なため、必要な映像の検索も難しくなっています。データ流出がないよう厳しく管理しつつも、検索しやすい・使いやすい管理体制の構築が急がれます。また、現在使用しているテープの再生デッキの修理・対応期限である2023年3月末までに、過去のテープをデータに変換しなければなりません。

現在は報道局がファイル化への移行を完了し、続いてスポーツ局も来年秋の新社屋での導入に向けて検討を進めています。また、昨年10月から一部の番組もファイル化での納品が開始され、将来的にはすべての番組をファイル化する予定です。課題を一つひとつクリアし、ファイル化によるメリットを活かしたより良い番組づくりを行っていきます。

OA

OA素材の送出もパソコン画面を見ながらボタン1つの操作で行える。

二次利用

番組販売、DVD、ネット配信などの二次利用、アーカイブ用の素材も、ファイルをコピーすればよいので、作業時間が大幅に短縮した。

CSRの取り組み

番組づくりと社会とのつながり

金曜の夜に3世代でテレビを囲む――リアルと希望がある現代のホームドラマをつくりたい

金曜8時のドラマ 三匹のおっさん ～正義の味方、見参!!～

株式会社テレビ東京
「三匹のおっさん」番組プロデューサー　山鹿 達也

2013年10月からスタートした金曜8時の連続ドラマ枠。「三匹のおっさん」は既に2クール放送され、好評を博しています。還暦を過ぎた3人が自警団を結成し、町の悪者を成敗するというシニアヒーロー物語。“新たなおっさん”像をつくり上げ、シニア層だけでなく孫世代にまで幅広いファンを獲得しています。

「三匹のおっさん」をドラマ化した背景からお聞かせください。

金曜8時の連続ドラマ枠は、50代以上の女性がメインターゲット層です。その層に喜んでもらえるドラマを考えた時に、浮かんだのが「三匹のおっさん」でした。この作品は作家・有川浩さんのヒット小説。個人的に原作を読んで以来、いつかドラマ化したいと考えていました。

人気作だけに、ドラマ化に際しては各局で激しい争奪戦となりました。最終的に射止めた制作会社のホリプロさんが、新設する「金曜8時のドラマ」に提案していただき、内容面と視聴ターゲットが合致したことで、放送が決定したのです。

人気小説のドラマ化となると、番組づくりでも気を使われたのでは？

まず、当然ながら原作ファンの期待を裏切らないことですね。有川さんの原作は、正義の味方が悪を痛快に成敗する単純なストーリーだけではありません。それだけではなく、親子・孫が食卓を囲んで言い合ったり、夫婦や嫁姑が喧嘩したりしながらつながっている家族の姿が描かれています。これは、今どきのリアルな世界では失われつつある家族の姿。こうしたホームドラマ的な世界観を大切にし、できる限り原作に忠実であることを意識しています。

パート2では、ドラマならではのオリジナルエピソードも盛り込んでいます。脚本のつくり込みは、構想段階から有川さんにご協力いただきました。結果、原作の世界観はそのままに、“おっさん”のキャラクターを活かしてパワーアップした内容になったと思います。

ドラマの要である“おっさん”ですが、北大路欣也さん、泉谷しげるさん、志賀廣太郎さんら俳優陣がとても魅力的ですね。

キャスティングの妙といいますか、見事にはまりましたね。北大路さんは重厚な役を演じられることが多く、当初は“普通のおっさん”に戸惑いを感じられたようです。しかし、実際の北大路さんはお茶目なところもありまして（笑）、演技でもその性格を出して非常にチャーミングな“キヨさん”※に仕立てていただきました。泉谷さん、志賀さんもしかり。

俳優陣の熱演により、地に足のついた魅力的なキャラクターを生み出せたことも、成功の大きな要因だと思います。
※劇中で北大路欣也さんが演じる役名

実際の視聴者の反響はいかがでしたか？

おかげさまで、想像以上の反響をいただきました。驚いたのは、想定していたターゲット層だけでなく、子供たちからの反響が意外にも大きかったことです。撮影現場では、近所の子供たちから「あ、三匹のおっさん！」「キヨさん！」などと声を掛けられることもしばしば。「キヨさんに憧れて剣道を始めました」という5歳の子からの投書もありました。

確かに、金曜8時というと子供たちは家にいる時間。おじいちゃんやおばあちゃん、お母さんらと一緒に3世代で「三匹のおっさん」を見てくれていたのです。昨今はどのテレビ局でもターゲットを狭く絞ってドラマをつくる傾向にありますが、「三匹のおっさん」は逆に幅広い世代がそろって見られるのが特徴的。そうしたドラマになり得たことは、非常に喜ばしいですね。

作品中では、“地域社会とのつながり”も重要なテーマとして描かれています。

彼らは町の自警団なので、活動範囲が“ご町内”限定。限られた地域の中にあるリアルタイムの問題を、テーマとして取り上げています。たとえば、ある回では町おこしのために夏祭りを復活させようとするのですが、寄付金が集まらない。ドラマでは、こうした身近でリアルな問題を、楽しみながら考えてもらえるように提示しています。そして“三匹のおっさん”が問題解決に奮闘する姿が象徴するのは、失われつつある古き良き昭和の世界観。地域のつながりのありがたさや家族の大切さなどの価値を、私たちに思い出させてくれます。

日本は高齢化社会を迎えて久しいですが、“三匹のおっさん”はまさしく同世代。シニア層に向けたメッセージはありますか？

パート１の最終回では、キヨさんが「まだまだしょぼくれて若いもんに負けているような年齢じゃないんだ」と言っていました。まさしくその通りです。最近は、60歳を超えた方でも若々しいですよね。このドラマを見て「自分たちも何かできるんじゃないか」と、元気になってもらえたらうれしいですね。

現在、団塊の世代はシニア層になっています。彼らは、がむしゃらに頑張ってあらゆる壁をこじ開け、今の日本を築いてきた尊敬すべき先輩です。番組づくりを通して、先輩たちに「いつまでも走っていてください」というエールを送りたいと思います。

最後に、金曜8時の連続ドラマ枠において、今後はどのようなドラマをつくっていきたいかお聞かせください。

金曜8時は、週末を迎えて家族がテレビを囲む時間。ちょっと温かくなって、元気が出るようなドラマをつくりたいですね。家族や地域、社会が抱えるリアルを描きながらも、どこか背中を押してくれるような希望がある――そんな、現代のホームドラマをつくっていきたいと思います。皆さんのお声があれば「三匹のおっさん」も、また帰って来るかもしれません（笑）。

また、この金曜8時の連続ドラマ枠を長く続けていきたいと思います。深夜枠である「ドラマ24」のコンセプトは、“とんがったドラマ”。これを10年続けた結果、今や主役級の出演者や気鋭のクリエイターが集う名物枠へと成長しました。金曜8時枠も10年続ける覚悟を持ち、“金8ブランド”として確立していきたいですね。テレビ東京ならではの良質なドラマを制作していきますので、ぜひ応援してください！

PROFILE

編成局 ドラマ制作部
山鹿 達也

1995年入社。経理、制作、宣伝業務を経験後、2003年7月からドラマ制作部。テレビ東京の正月名物番組「新春ワイド時代劇」を長年担当するほか、「鈴木先生」や「ソウル国際ドラマアワード2010」グランプリを受賞した開局45周年記念番組「シューシャインボーイ」などを担当。現在は、「ドラマ24」や「水曜ミステリー9」も手掛ける。